岐阜経済大学論集 33 巻 4 号（2000 年）

日本人の「待ち心」今昔（3）

武井勇四郎

序
第一章 「垣間見」の日本的風土
一節 「垣間見」の日本的風土
二節 「ま」「待ち」「待つ間」
三節 「待針」――日本語の主客重合
四節 「垣間見」の懸想
五節 「待つ間」は未来の垣間見 ……（以上，第 33 巻第 2 号）
第二章 日本人の「待ち心」の原風景
一節 「待つ恋」の和歌と妻問婚
二節 三年待って逢わぬは縁の切れ目
三節 多情の和泉式部と憂愁の日々の『蜻蛉日記』
四節 待ち通す一輪のしおらしい花――末摘花
五節 待つ「夕暮」と後朝の「有明の月」 ……（以上，前号）
第三章 『枕草子』の待つものの品々と
斎藤徳元の『尤之双紙』
一節 清少納言の待ち時間観
1） 「心もとなきもの」の品々
2） 除目待ち
3） ほととぎすの初音待ち
4） 効験「待つ間」の情景
5） 雪山の賭事の結果待ち
二節 『尤之双紙』の「待つものの品々」 ……（以上，本号）
第四章 「待つ間」の美意識――兼好法師
一節 「待つ間」の時の美意識
二節 「死期はついでを待たず」
三節 仏道入門に「待つことなかれ」
四節 陰翳の美と垣間見の美と

第三章　『枕草子』の待つものの品々と斎藤徳元の『尤之双紙』

一節　清少納言の待ち時間観

清少納言は『枕草子』のいくつかの段で待ち時間について彼女の繊細な思いをエッセイ風に綴っている。それは平安貴族の宮廷生活に由来する時間意識であって，平安朝の物語文学に見られない所見もある。神経の細やかな女性でしか綴れない「心もとなきもの」，ユーモア溢れる除目待ちの叙景，ほととぎすの初音聴きの外出，修験者の効験待ちの情景，そして当時初めて賭事の心理状態を綴った注目すべきエッセイ，雪山がいつまで融けずにあるかの賭事の結果待ち。清少納言は斎藤徳元の『尤之双紙』のように待つもののもの尽くしの段を設けていないが，これらの随想は当時の宮廷女房の待ち時間観を端的に表明している。

1）「心もとなきもの」の品々

小学館『古語大辞典』(1983年刊）によれば，「こころもとなし」は 1) 心が落ち着かず，気掛かりに思うさま。おぼつかない。2) 物事が容易に実現しないのを，待ち遠しく思うさま。じれったい。3) 物足りず，不満に思うさま。不十分だ。未熟だ。

『枕草子』(岩波新版）の 153 段の「心もとなき物」には，「待ち」の語句を使う箇所が三カ所ある。

「心もとなき物　人のもとにとみの物ぬいにやりて，待つほど。」つまり，急ぎの縫い物を依頼してその仕上がりを待つこと。

「なに事にもあれ，いそぎてものへいくべきおりに，まづ我さるべき所へ

いくとて，「たゞいまをこせむ」とて，出でぬる車まつほどこそ，いと心もとなけれ。」つまり，急ぎの用のある人に車を貸してその車の帰って来るのが待ち遠しいこと。

「物見，寺詣などに，もろともにあるべき人を乗せにいきたるに，車をさしよせて，とみにも乗らでまたするも，いと心もとなく，うちすててもいぬべき心ちぞする。」（岩波新版 153 段）つまり，寺詣でに立ち寄ったがぐずぐずしていてすぐ乗らないのでイライラすること。

いずれの場合も待たされることによる気の落ち着かないじれったさである。1)，2)の意味に当たる。

しかし，清少納言が「心もとなき物」として掲げた事柄はほとんど未来にかかわる事象が多い。例えば，出産予定日を超えているとか，成長する子供の将来とか，出産後の後産が遅いとか，炒炭を熾すのに時間がかかるとか，針に糸が通りにくいとか（上村松園の日本画の対象），返歌をするのに時間がかかってあせるとか，恐い夜，夜の明けるのが遅いとかである。

とすると，「心もとなし」は，未来のことが定まらず不安定で，その不可知から来る心の落ち着きのなさ，じっとしておれない気分，気ばかり焦ること，こころの置き場のないこと，焦りでイライラすることである。とりわけ事の出来を「待つ」ことにかかわる気分となろう。この意味では「心もとなし」の品々は待ち遠しさの一般的な類例となっている。

3)の意味の例文として「（梨の）花びらのはしにおかしき匂ひこそ，心もとなふつきためれ。」（同上 34 段）が挙げられているので，先の『古語大辞典』の「こころもとなし」はほぼ『枕草子』に拠ったとみてよい。

2）除目待ち

除目（じもく）とは平安時代以降，公卿が天皇の前で地方官や京官を任命する儀式である。除というのは旧官を除いて新官を任ずること，目は人名目録のこと。希望者は申文を書いて自己を PR し上申する。春の除目は県召

（あがためし＝地方長官），秋の除目は司召（つかさめし＝京官）で，年二回あった。出世するもしないもこの除目できまる晴れ晴れしい人事の審議。当時，除目の審議は宮廷で三夜行われ，その結果が早朝に当人に伝えられた。

『枕草子』の除目待ちの叙景は見事である。清少納言の宮廷内の観察はしたたかであるだけでなく，その筆遣いは辛辣で読者を楽しませるユーモアに溢れている。

〈除目のころの宮中はとても愉快だ。雪が降り氷が張っている寒いときに，申文を持ち歩く。四位，五位の若い意気健康な人たちなら頼りになるが，白髪の老人がつてを求めて女房の局などに出かけ，自分の才能を売り込んでいる。それは独り合点の言い分で，若い女房たちはまねして笑うが，当の本人は知るはずがない。「上手に主上に申してください」と頼むが，地方官を得た人はよいが，得なかった人は気の毒千万である。〉（岩波新版『枕草子』2段）

地方長官や京官につくことは大出世であり，一大財産を築くチャンスである。白髪の老人が自分の非才を省みず女房に根回しに出かけ，裏工作の手を打つ。その描写は実感がこもっていて髣髴としてくる。ユーモアたっぷりだ。

そして22段に除目で官職を得なかった家の清少納言の叙景がまた見事である。

〈除目で国司になれなかった家。今年はかならず決まると聞いて，以前仕えた人，よそに行ってしまった人，田舎住まいの人たちがぞくぞく集まってきて車の置き場もない有様。また祈願成就のもの詣でにわれもわれもとお供し，もの食い，酒を飲んで大騒ぎして待っているのに，一向に夜明けまで戸を叩く朗報の音沙汰がない。これは変だと聞き耳を立てるが先払いの声がして上達部が皆宮中から退出してしまう。情報を聞き取るために昨夜から寒さにふるえている下男が物悲しく歩いてくるが，結果はどうだったかとも聞き出そうともしない。よそからきた情況を知らない人が「殿は

なににおなりになりましたか」と聞くと，返事は「なになにの前司です」と濁す。殿の出世を頼みにしていた人の落胆はきわまりない。朝になるとぎっしり家に詰めていた人々も一人，二人とこっそり抜け出していく。古くから仕えていた者はそうあっさり立ち去ることができずに，来年の空く国々を指折り数えて右往左往している。こんな有様を見るにつけすさまじきものと言うしかない。〉（同上 22 段）

除目の審議は夜行われ，早朝に当人に知らされる。親戚縁者が集まって夜を徹して朗報を朝方まで待つが，朝方まで音沙汰なく皆散会していく。その有様の清少納言の描写は辛辣なまでにユーモアたっぷりであり，こうした様子は「すさまじき物」の品々の一つに加えられている。彼女は朗報を得た光景は綴らない。

清少納言は「とくゆかしき物」（早く知りたいもの）の一つとして，〈除目の早朝，知人で必ずしも任官しない人でも結果は知りたい〉（岩波新版 152 段）と綴っている。このことからみて，当事者でない彼女ですら除目の結果が気になって徹夜している様子がうかがえる。

清少納言は除目には悲喜こもごもの人生ドラマがあるとみている。

除目で一等国に着任が決まった人を「したりがほなる物」，つまり得意顔の人と表現しているが（岩波新版 178 段），むしろ，期待はずれの情景の方に彼女の関心が示される。彼女の視点は除目の成否の結果を朝方まで待つ関係者の待ち時間の情景に注がれる。勝者よりも敗者の落胆ぶりの有様を待ち時間の中に見て取る。読者もその待ち甲斐のない時間の流れに人生ドラマを読み取る。

『更級日記』（1059 年）にも，著者の父（＝菅原孝標）の除目はずれの叙景がある。あてのはずれた翌朝，おなじ失意の親しい人から「さりともと思ひつつ，明くるを待ちつる心もとなさ」と書き添えた贈歌が孝標の娘にとどく。

明くる待つ鐘の声にも夢さめて秋のもも夜の心地せしかな

この詠歌には，吉報が得られない「待つ間」は，まさに秋の夜長の「百

夜」も過ごす長さに延びることが象徴的に詠われている。いくら待っても良い知らせは来ず夜が明けてしまい，その「待つ間」は夢やぶれる失意の長い長い時間となる。この返歌として考標の娘は父の除目の期待はずれを，

暁をなにに待ちけむ思ふことなるともきかぬ鐘の音ゆゑ

暁を何のために待ったのでしょうか，夜明けを告げる鐘の音は期待はずれの，聞くも空しい響だったことですよと，先の贈歌と同じ心境で詠い，娘は父の失意を分かち合う（小学館新版『更級日記』p.308）。その後，菅原考標は遠い遠い常陸に任官を得たがはや老人で任官の悦びはなく，娘も悦びの歌など詠っていない。

ところで，清少納言の父清原元輔も除目にありつけずわが身の沈淪ぶりを詠っている。

（前詞）除目の朝に，命婦左近のもとに遣はしける

年ごとに絶えぬ涙や積もりつゝいとゞ深くは身を沈むらん

（拾遺 443　清原元輔）

こうしたこともあってか清少納言は除目には多大の関心を示した。

概して，長く待ってもその結果がよければ歓喜に変わりその長さは悦びにかき消されるが，逆に結果が悪ければその長さは余計長く感じられ忘れがたい感情になる。これが「待つ間」の心情の色合いがなさしめることなのである。除目にありつけた歌はなく，長い悲しみが和歌を生みだす芸術の昇華エネルギーとなるのは皮肉である。

見るかいありて嬉しきは　契し今朝の玉章　除目の朝の上書

（岩波新版『閑吟集』〔1518 年〕251）

とあり，後朝の文と除目の通告書は早朝に見るに甲斐のあるものとされるが，後者にありつける人はごく限られていた。

除目の予想屋――

『宇治拾遺物語』（小学館新版 10 巻－7「豊前王の事」）と『今昔物語』（小学館

旧版 31巻－25）に除目の話しがある。両者は同話。当時，除目の占い師までがいて予言している。如何に除目が官吏にとって一大関心事であるかが分かる。話しはペテン師じみているから面白い。

〈桓武天皇の第五皇子に豊前（とよさき）の大君という人がいて，四位で官職は刑部卿，大和守であった。世事に長け，すなおな心の持ち主で，朝廷の政治のよいわるい点をよくわきまえていた。除目の際は，国司の欠員の数を知っていて，希望者に国の格と引き比べて「その人はおなりになるだろう。その人はしかるべき理由を申し立てても望めまい」などと，国ごとに予言した。それを人が聞きおき，除目のあった翌朝に調べると，この豊前の大君の推量と少しも違わなかった。「この大君の推量除目は見事だ」と噂が立ち，除目の前日にはこの大君の家に集まった。「きっとなるだろう」と言われた人は，手を揉んで喜び，「なれまいね」と聞いた人は，「何事をぬかすかこの老いぼれめ。道祖神を祭って気が変になったのだろう」などと，ぶつぶつ言って帰った。「きっとこうなるだろう」と言う人がならないで，意外にも別人がなった場合は，「この人事は失敗だった」などと，世間の人は悪口を言った。そんなわけで朝廷でも，「豊前の大君は，除目をどのように言ったか」と，親しく仕えている人に，「行って聞いて来い」と仰せられたものである。〉（小学館新版『宇治拾遺物語』p.320）

こうした官位の高い人物のペテン師まがいの振る舞いがまかり通る風景こそ，当時の時代風潮であって，除目がいかに官吏の一生の浮沈を左右したかを伝えて余りある。除目を審議すべき朝廷がその占い師に聞きに行かせるところが落ちだ。

3） ほととぎすの初音待ち

「織田が米を搗き　羽柴（秀吉）がこね　天下餅座って食うは徳川家康」は天下一統のプロセスをうまく表現して，分かりがよい。

対して，

鳴かぬなら殺してしまえ時鳥――――織田信長（短気）
鳴かぬなら鳴かしてみましょう時鳥――豊臣秀吉（工夫）
鳴くまで待とう時鳥――――――徳川家康（忍耐）

（出典は江戸幕末の随筆「甲子夜話 53」松山静山）

諺とも言えるこの見事な表現は戦国武将の性格をほととぎす（時鳥，郭公）の対応になぞらえている。しかし，今ではほととぎすの初音待ちの風流な習慣はないし，それどころか山村にでも住んでいなければ，どんな鳥でいつごろ鳴きどんな鳴きかたをするのか皆目見当もつかない時代である。この表現はほととぎすの初音待ちの風習があった頃の名言であるが，ことばとして知られていても今の都会人の実感を伴なわない。

ここで一旦『万葉集』にもどりたい。

『万葉集』の巻8の夏の雑歌と相聞（四十六首）の歌はほとんどほととぎすの撰歌で占められている。巻10の夏の雑歌と相聞（五十九首），巻19（大伴家持が越中守赴任中）にもおびただしく集歌されている。鳥を詠った歌としては春の鶯，秋の帰雁と比べて桁違いに多いのにも驚かされる。

雁は飛ぶ姿が詠われるに反して，ほととぎすはその形姿ではなく，その声であることが一大特徴である。しかし，その鳴き声を美声とした詠歌はなく，ただ鳴き声が夏の到来として詠われたのである。

四月から五月にかけては，現在と違って森に，宮廷の庭に，沢山飛来し，その姿は木に隠れ見とどけがたく，その声ばかりに耳をそば立てている様子の詠歌が『万葉集』に多い。そして昼だけでなく夜中にも明け方にも鳴くので，夜を徹して一声を聴く風習があった。

この鳥が渡り鳥であることは奈良時代では知られず，初夏に山から里に，鶯のように下りて来るとされていた。

奈良時代その鳴き声はどう聞き取られたか分からないが，古くは「テッペンカケタカ（天辺駆けたか）」とか「ホンゾンカケタカ（仏壇に本尊かけたか）」とか，鶯の「ホーホケキョウ（法華経）」と同じく仏教的に聞きなされてい

る。最近では「特許許可局」。しかし，実際聞いてみると現代人には「特許許可局」の方が近い感じだ。鶯のような美声とは言えない。昼でも夜でも常なく鳴くので無常鳥とも言われた。姿を木の葉に隠していてしかと確かめにくい鳥で，鳩より少し小さめで尾が少しながく可愛げがない。また，この鳥は奇妙にも奈良時代より霊界からの使者との俗信があったようで，「死出の鳥」とも言われている。

当時，ほととぎすの鳴き声が注目されたのは夏の到来である。立夏がほととぎすの初音の聴取から始まり，春の桜の視覚から夏の鳥の聴覚への転換であり，それがほととぎすの一声だった。

『万葉集』には現に鳴いている叙景，鳴いて欲しい願望の詠歌が随分あるが，鳴き声を待つ，特に初音を待つ詠歌は数少ない。

端的に「待つ」の語句を折り込んだものは次の大伴家持の歌である。

ほととぎす待てど来鳴かずあやめぐさ玉に貫く日をいまだ遠みか

（万葉 1490　大伴家持）

そして初声を待つ詠歌は『万葉集』ではごくまれである。

ほととぎす汝が初声は我にこせ五月の玉に交へて貫かむ

（万葉 1939）

常人も起きつつ聞くそほととぎすこの暁に来鳴く初声

（万葉 4171　大伴家持）

筆者は五年ほど前，JR 下田駅から二上山（にじょうざん，雄岳，雌岳）を登り当麻寺に下りた。この度，富山県高岡市の「万葉祭り」（10 月 1，2 日）の折りに MTB（マウンテンバイク）を駆って家持が歩いたと見られる氷見市，雨晴，伏木周辺，二上山（ふたかみやま）万葉ライン，国泰寺へとツーリングした。

大伴家持は越中守として五年間（746–751）富山県高岡市伏木に赴任した。伏木に国庁（勝興寺付近）があった。高岡市からよりも，氷見市方面から東に遠望した二上山（ふたかみやま，男山 274 m，女山 258 m）は奈良県の大和高田か

ら西に望む二上山（にじょうざん，雄岳517 m，雌岳474 m）に小ぶりながらよく似ている。山頂から見る眼下の高岡市の景色も奈良盆地とよく似ている。

家持は越中の二上山に触れた長短歌を七首詠じている。なかでも次の詠歌は筆者の興味を呼ぶ。

二上の尾の上の繁に隠りにしそのほととぎす待てど来鳴かず

（万葉 4239　大伴家持）

この詠歌は，家持がヒナ（鄙＝伏木）の二上山に，遠く離れたミヤコ（都＝奈良）の二上山を重ね合わせ，今か今かと待つほととぎすの初音に帰京の宣旨待ちを和音で響かし，望郷の想いを切々と詠った歌とみたい。

旧暦の四月から五月の節句にかけての頃は新緑を深め外出するにはうってつけの時候である。平安時代，初音を徹夜で聴こうとしただけでなく，山里へ出かけてまでほととぎすの初音を聴き和歌を詠む習わしがあった。

清少納言は初音を雨混じりの五月五日に，退屈しのぎに「郭公の声をたづね行かばや」と中宮様に申し出て，車を駆って賀茂の奥に聴きに出かけ，やかましいほどなきわたっているのを聞き，中宮様や聴きたがっている人に聴いてもらえないのが残念だと綴っている。清少納言はほととぎすの歌を詠もうとするが途中の家のもてなしで詠みそびれてしまう。宮中に帰って中宮様に歌はどうしたのかと責められるが，雷雨にとり紛れて詠わずじまいに終わった（岩波新版『枕草子』95段）。

清少納言は「鳥は」のもの尽くしの中でほととぎすに触れて，鶯と比べてほととぎすの方が筆舌に尽くしがたいほどすばらしく，卯の花，花橘を宿にして少し隠れている気立ては心にくいとし，「五月雨のみじかき夜に寝覚をして，いかでひとよりさきに聞かむとまたれて，夜ふかくうちいでたるこゑの，らうらうじう愛敬づきたる，いみじう心あくがれ，せんかたなし。六月に成りぬれば，おともせずなりぬ，すべていふもをろか也。」（同上 38段）と綴る。誰よりも先に早く聞くため真夜中まで待ちに待って聴くのを風流の雅

致であるとする。つまり，ただ鳴くのを聞きとるのでなく，聴き手に待たれて鳴くのが雅趣あるとみる。この見解はすぐ後に述べる覚盛法師の詠歌の，待つことによる美意識の昂揚の見解を先取りしたものである。

これまで日本人の「待ち心」の源流は万葉人の「待つ恋」の詠歌に遠因すると強調したが，以下に見られるほととぎすの詠歌のおびただしさを考慮すればほととぎすの鳴き声を待つことによっても日本人の「待ち心」の伝統が培われていると言わねばなるまい。ほととぎすの一声は晩春から初夏への時候の節目であり，それを目でなく耳で感じとる。日本風土がならしめる雅である。

初音待ちの美意識――

桜色に染めし衣をぬぎかへて山ほとゝぎす今日よりぞ待つ

（後拾遺 165　和泉式部）

今年だにまつ初声をほとゝぎす世にはふるさで我にきかせよ

（詞花 57　花山院御製）

ほとゝぎす夏のよな〳〵まち〳〵てこぞもことしもひとこゑぞきく

（「前関白師実歌合」21　岩波旧版『歌合集』p.227）

きかでたゞ寝なましものを郭公中〳〵なりやよはの一声

（新古今 203　相模）

『新古今集』では「一声」に視点ならぬ聴点が絞られる。確かに二声を待つ詠歌もある。二声には一声ほどの期待度がないし，緊張度も低い。待ち望んで一度聴けば二度目のそれは一度目ほどの意識の昂揚はない。一声が待ち手の聴覚を打つ。

『千載和歌集』の次の一首は注目すべきである。

待たで聞く人にとはばやほととぎすさても初音やうれしかるらむ

（千載 夏歌 154　覚盛法師）

この詠歌は待っていて聴いたほうが待たないで聞いたより一層雅趣がある

ということを詠っている。初音を聴き取る嬉しさは待つことによって高められる。待つことによる美意識の昂揚である。この詠歌は日本人の「待ち心」にとっての貴重な詠歌である。

ほととぎすは確かに四季の巡りによって到来する景物であるが，草花，月の出と違って，特に初音は人間の思いのままにならぬもので，わざわざ野山を聴きに尋ね廻っても，またいつまで待てば必ず聞けるという保証は何もない。いわばあなたまかせの気ままなものだ。とするとその時候になればいつも意識していて，いつ鳴くのかと待ち構えることになる。ちょうど夕暮からいつ来るか分からない夫の来訪を今か今かと待つのと同趣である。初音待ちはままならぬ点で「待つ恋」の歌と一脈相通じる。つまり，「待つ間」の有情さと時間意識が詠歌の対象となり，結果をではなく，結果を待つまでの期間の心情的時間が意識化され詠歌の対象となる。鳥の初音が定めがたければそれだけに待って聴いた甲斐があり，その感興が高まり，そのことで「待つ間」は満たされる。

「一声」の結句で和歌を締めくくるのはその美的雅趣を引き立たせる技法である。待ちに待つあこがれの渇きは一声で癒される。初音こそ「待つ間」を美的時間たらしめる。

覚盛法師および『千載和歌集』の撰者の優艶な美意識は『古今和歌集』にはないもので，その後の150年間を通じて培われた時の美意識である。それはさらに時代を経て鎌倉末期に兼好法師によって「待つ間」の時の美意識（このことについては次章で論ずる）として『徒然草』で定式化され，さらに頓阿法師によって幽艶な美意識に高められる。

頓阿法師は，

ほのかなるたゞ一声もほとゝぎす猶（なほ）おもひでの有明の空

（「頓阿法師詠」80　岩波新版『中世和歌集』室町篇）

と詠じた。有明の月にほのかに聴いた一声が，朝方の空にほのかに残るその月のようになおも想い出される。待ちに待って聴いたほととぎすのほのかな

一声がほのかな有明の月影と一緒に想い出される美意識は幽艶である。

「待つ恋」の詠歌は鎌倉中期を迎えるとほとんど詠われなくなるが，ほととぎすの詠歌は延々と江戸時代を通じて詠われる。江戸後期の，自然のままの「ただごと歌」を旨とした小澤蘆庵（1723–1801）は，ほととぎすをかなり詠じた。その一首。

人なみにまつとも我をとひはこじ尋てきかむ山ほとゝぎす

（「六帖詠草」74　岩波旧版『近世和歌集』p.275）

蘆庵は待っていても聴かせてくれないので山に尋ねてでも聴こうと出かける。

ほととぎすにまつわる話しはいろいろとあるが，江戸笑話集の『鯛の味噌津』（蜀山人）の一話と江戸の狂歌で締めくくろう。

「　　初音

「だれぞほとゝぎすの初音を聞いたか」といへば，「聞いたとも〳〵。きのふの朝聞いた」「ソレハおそい事，われらは四五日前に聞いた」といはれ，まんがちなやつ（＝出しゃばり者）が出て，「いま卯月（＝旧暦四月）に入て聞いてはおそい。先月の末に聞いた」といへば，そばから，「ナニ先月聞いたか，おいらはとつくに去年の夏聞いておいた」。」（岩波旧版『江戸笑話集』p.437）

一声の初音も高きほとゝぎすこれぞてつぺんかけねなしなる

（狂歌 236　加保茶元成〔1754–1828〕小学館新版『狂歌』p.571）

ほととぎすの初音と鰹の「初値」，江戸の「掛け値なし」の商売の仕方とほととぎすの鳴き声の「天辺駆けたか」の聞きなし。待ちこがれるほととぎすの一声と江戸の初鰹売りの行商の声，鰹の初値も高ければ聴いた初音も空高く鳴く。この天の風雅と地の商魂の奇妙な取り合わせが狂歌の狂歌たるところ。

4） 効験「待つ間」の情景

清少納言は『枕草子』の随所で修験者や僧の加持祈禱について綴っている。

彼女の目は効験のあったことに向けられず，効き目の出るまでの待ち時間に向けられている。辛辣さをユーモアで包む彼女得意の叙景が際立つ。その情景は「にくきもの」「苦しげなもの」「すさまじきもの」の品々の彼女得意のもの尽くしに数え入れられる。

当時，病気は「物の怪」が憑いたことによるとされた（小学館新版『枕草子』181段）。物の怪と言えば『源氏物語』の六条御息所の生き霊と死霊がその怨念ぶりによってなにより有名だ。

当時，医者が少なく修験者や僧の修法にたよって治癒するという「物の怪」の調伏が主流であった。修験者（山伏せ）や，陰陽師が真言密教で体得した修法（法華経の誦経）で人に憑いた「物の怪」を退散させることで病気を治したり，また当時出産は母親や子の死を伴なうことが多く，安産を願って祈禱師（＝陰陽師）や修験者を呼んで無事息災を祈る。道長の長女彰子中宮の出産の際，大がかりな加持祈禱が行われた。それは紫式部の日記の冒頭を飾る迫力のある名場面である（小学館新版『紫式部日記』pp.130）。こうした「物の怪」退散の話しは『今昔物語』，『宇治拾遺物語』，『発心集』，『徒然草』などにも数々綴られている。

当時の修験者は山岳信仰と仏教の習合でほとんどが密教系統の僧である。生き霊がとり憑く背景には魂が身から離れるという心身分離説の一般的通念があった。魂が身体から抜け出し，生き霊として，また，墓塚から立ち昇る死霊として，人にとり憑くという信仰が横行していた。とりわけ中世の謡曲にその傾向が強く出る。修験者が登場する能や歌舞伎も随分ある。

鴨長明撰の『発心集』に見られる次の話しは面白い。

〈侍従藤原成通が九歳のとき熱病に冒され年来の僧都を呼んで祈禱させたが効き目がなく，高熱が続いたので看病していた父母が別の僧を呼んだ方

がましだと相談しているのを聞いて，幼いながら父母に言う。「いつもの僧でいいのです。そのわけは乳母のいうところでは腹の内よりこの九歳になるまで無事息災であったのはあの人のお陰です。今日この病であの僧を軽んずる事は気の毒です。たとえ，別の僧を呼んで物の怪が調伏されたとしても本意ではありません。ましてや必ずそうなるとも限りません。こんなことぐらいで死ぬことはありません。私を愛しているなら，何度もあの僧を呼んで下さい。きっと治るでしょう。」

翌日，父母は子の言葉に感動して，また，僧都を呼んでわが子の言ったことをありのままに申し上げる。「隠し立てすることもありませんが，あなたをおろそかにするわけではありませんが，わが子の様子を見ているとつい，親馬鹿になって，あなたがどんなお気持ちになるかも顧みずに……」と泣き泣き申し上げる。

僧都はこれを聞いて，おろそかにできず，その日は特に心を込めて，泣き泣き誦経したので見事に平癒した。〉（新潮社版『発心集』6－6「侍従大納言幼少の時，験者の改請を止むる事」）

これは，修験者を招くに際して，子煩悩の父母が子に諭される一話であるが，鴨長明は成通の人情深いこころばえを褒めている。長明は同じ僧の身として効験のほどをこころならずも評価しているのであろう。

また，「信貴山縁起絵巻」に出て来る命蓮法師（鉢を長者の倉に飛ばして布施を得ていた法力の持ち主）が帝の病を直すために信貴山から送った剣の護法童子はたちどころに病を治す。命蓮法師の功徳と法力が讃えられる。

それにしても修験者の効験のほどを今か今かと当時の人が不安ながら待つ様子が物語や仏教説話に語られる場面が多い。物の怪の調伏がままならなかったからだ。

清少納言は「物の怪」を調伏した場面よりも，むしろ効験が出ない場面を叙景する点では先の除目待ちと同じ趣向を持つ。肯定の成果が出ない悲劇の方がドラマ性があり，面白いのである。

清少納言は，修験者の効験が出ない様子を，病人からすれば「にくきもの」，修験者本人にとっては「苦しげなもの」，傍観者から見れば「すさまじきもの」であると三様の見方をとる。以下がその叙景である。

(1) 「にはかにわづらふ人のあるに，験者もとむるに，例ある所になくて，ほかにたづねありくほど，いと待ち遠に久しきに，からうじて待ちつけて，よろこびながら加持せさするに，このごろ物の怪にあづかりて困じにけるにや，ゐるままにすなはちねぶり声なる，いとにくし。」（小学館新版26段）

急病人が出たので，あちこち探し廻ってやっと修験者を見つけだして連れて来たものの誦経の効き目も出ない内から，ほどなく居眠り声になるのは「にくらし」と評する。清少納言の身辺の人が急病に罹ったのであろうか，その評は厳しい。彼女自身，修験者の修法を疑っていなく，ただ効験が即座に出るとは限らないと思っている。

(2) 「こはき物の怪にあづかりたる験者。験だにいち早からばよかるべきを，さしもあらず，さすがに人笑はれならじと念ずる，いと苦しげなり。」（同上 151段）

つまり，修験者が一筋縄では調伏できない手ごわい「物の怪」を早く退散させようとするが，できず，効き目がすぐ出ないので周りの人から笑い者にされまいと恐れて一生懸命数珠を揉んで誦経する。

(3) 清少納言は，以下の情景を「すさまじきもの」の品々に数え入れ，先の除目待ちで朗報を得られなかった叙景と併記している。

〈修験者が，「物の怪」を調伏するというわけで，これとばかり得意顔をして，独鈷（とこ）や数珠などを物の怪を乗り移らせる女性の「憑坐（よりまし）」に持たせて，蟬のような声をしぼり出して誦経しているが，一向に「物の怪」は退散しそうもなく，護法童子も「よりまし」につかない。一家の者が皆集まって祈念しているが，男も女も「これはあやしいな」と思うものの二時間も誦経するが，疲れて，「一向に乗り移らない。立って

しまえ」と言って，「よりまし」から数珠を取り返して，「ああ効き目がないわ」と言いながら，額から上の方に手を上げて，あくびを自分の方からして，物に寄りかかって寝てしまう。大変眠たいのを，身寄りでもない人がたたき起こして文句を言うのは大変すさまじい。〉（同上 22 段）

「やまいは」（181 段）には声のよい僧を呼んで加持祈禱させるが，僧が沢山の見舞客の中の女に横目をつかって誦経しているので，効験なんか怪しいと清少納言はみる。僧の加持祈禱で効験があって，病が小康状態をたもつエッセイもあるが，それは僧よりも「仏のあらわれたまへるとこそおぼゆれ」と仏の御利益であると醒めた目で見ている（同上「一本の 23 段」pp. 460）。

清少納言が「すさまじきもの」と言う場合は，この例や先の除目の例に見られるように，待っていても良い結果が得られない，待つ甲斐のない，期待はずれの，傍観者から見て興ざめと映る場合である。

先の「心もとなきもの」とこの「すさまじきもの」の異同を見ておくことが必要だ。いずれも「待つ」ことにかかわるが，彼女の鋭い繊細な感性は，そのかかわりが当事者か傍観者かによる微妙な相違を見て取る。同じ「待つ」にしろ待つ当事者の心中か，待つ情況を観察する傍観者の心中かの相違に注目しているわけである。「心もとなし」の品々は清少納言が女性の視点から見た心の機微であり，「すさまじきものの」品々は観察者としての清少納言のユーモアある手厳しい評言である。

5） 雪山の賭事の結果待ち

清少納言の待ち時間の考察で一番際立っていて注目すべきはこの最後のエッセイである。爾来，『枕草子』の雪のことと言えば，中宮様が「香炉峰の雪いかならむ」とおっしゃった時，清少納言は白居易の「遺愛寺の鐘は枕をそばたてて聴く，香炉峰の雪は簾をかかげて見る」を念頭に置いてすぐさま格子を上げさせ，簾を高くあげたという彼女自身の自慢話しである（同上 280 段）。『十訓抄』（1252 年）でも清少納言のその時の機転が賞賛されている

(小学館新版『十訓抄』pp.56)。またこの場面は後世女流画家たちの格好の題材ともなっている（上村松園，伊東深水)。

しかし，「枕草子絵巻」の白描画では雪山を作る情景を描いた場面がある。どうしたわけかこちらの話しはさっぱり話題にならない。

賭事の時間を考察したのは当時清少納言を措いていない。「源氏物語絵巻」には囲碁を指す場面はあるが，勝ち負けの心境を描いた個所は『源氏物語』にはない。双六を打つ絵巻もあるが，どんな心境で指し進めているかを伝える文章はない。

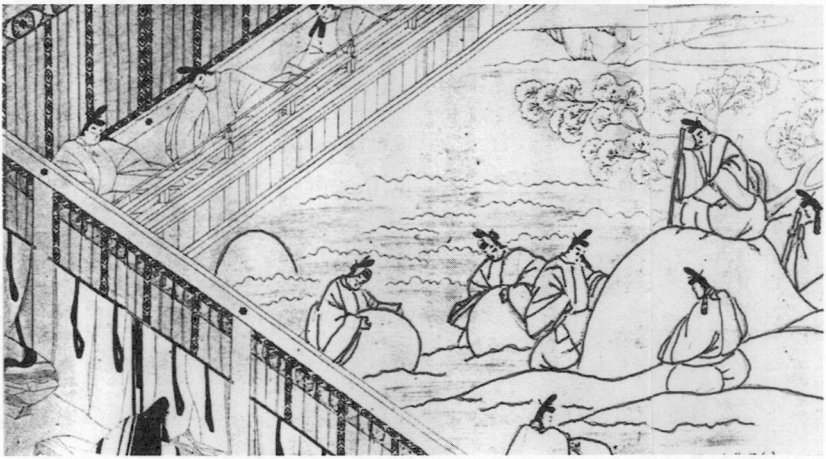
当時勝負事としては，双六，囲碁，将棋，歌合，根合（＝菖蒲の根の長短やそれに添えた歌の優劣を競う)，貝合，絵合，薫物合，前栽合（＝庭の草木やそれの歌合)，扁合（＝漢字の扁を合わせる)，賀茂の競馬，流鏑馬などがある。対局者，左右の人の勝ち負けの心理状態をつぶさに綴ったものがない。『袋草紙』には歌合の判者の勝敗の悔しさに文句をつける叙景が多々あるが，双六，囲碁の勝敗の，心理描写は皆無に近い。

対して『枕草子』の「職の御曹司におはしますころ，西の廂」(岩波新版 83段）は注目すべき段で，筆者をして言わしめれば「賭事待ち」の段と呼びたいほどである。「枕草子絵巻」の絵師はこの段に注目し中庭に大きな雪山を作る情景を白描画で描いている。「しはすの十日よひのほとにゆきいみしうふりたるを……」の詞書があるので83段の背景描画である。

清少納言のギャンブルの心理分析は鋭い。その興味深さは前に掲げた「児の掻餅するに空寝したる事」に匹敵する。そして現代においてもその分析は遜色無いばかりか賭事の本質を衝いている。

大雪が年末に降り大きな雪山が庭に作られる。室内から雪を愛でる光景であるが，余興として，中宮がいつまでそれが融けずに残るかということを清少納言と賭をする。その成り行きを物語り風に劇的に仕立てている清少納言の手腕も見応えがある。83段の本文はかなり長いのでその大意を述べよう。

〈十二月の十日余りの頃に大雪が降った。中宮様の命令で庭に雪山を作ら



せることになって，大勢の人に褒美を出すといって大がかりに人をかき集めて高い雪山を作らせた。

そこで中宮様が「この雪山がいつまで融けずにあるか」と仰せられたので，大方の女房は十日間余りしかもたないと答えたが，私だけは「正月の十五日まではきっとあります」と返事した。中宮様もそうまではもつまいと思われた。女房がみな年内までだと言ったので自分は先まで言い過ぎたか，正月元旦とでも言っておけばと内心では思ったが，言い出した以上ひっこみがつかず強情を張った。

二十日頃には雨が降ったが消える気配がない。少し背丈が低くなったので「白山の観音様どうか消さないでください」と祈るのも気違いじみている。

雪山は少し低くなったが年が改まった。正月元旦にまた雪が沢山降ったのでこれはよいことだと思ったが，中宮様は「新雪はかき捨てよ」と命じた。

しかし，それでも雪山は越前の本物の白山のように消える気配がない。黒くなって見栄えはわるいが，もう賭事に勝った気になって，なんとかし

て十五日まで待って中宮様に見せてやろうと思った（「勝ちぬる心ちして，いかで十五日待ちつけさせむと念ずれど」）。しかし，他の女房どもは七日が限度だと言う。この結果を見届けたいと皆が思っている時，急に中宮様は正月三日に内裏に行かれる。これではこの結末を見ずに終わってしまいそうで残念だ。ほかの女房も結末を見届けたいと言う。私も言い当てて雪をお目にかけたい。

植木番に「この雪山をよく番をして子供に踏みつぶされないようにしなさい。よく番をして十五日までもたせるのですよ，中宮様からもご褒美が出ますよ。私個人もお礼しますよ」と私が果物などやって頼むと，承知した。中宮様が内裏に行かれたので七日に里に帰った。その間も雪山のことが気がかりなので下人たちを使いに出して見張らせ報告させた。

正月十日頃，「五六尺ほどあります」と聞いて嬉しく思った。十三日夜大雨が降り，これで融けてしまうかと不安で「もう一日も待ち切れない」（「いま一日も待ちつけで」）と，夜も起きて私が言い嘆くので，聞く人は気違いじみていると笑った。下人をたたき起こして見に行かせる。「円座ほどはあります。植木番は子供をよせつけず，「あしたあさってまできっともちますからご褒美いただきます」と言っていますよ」との返事で私は嬉しくて，賭は勝ったも同然と思った。「早く明日になったら，歌をつけて，雪を箱に入れて中宮様にお見せして差し上げよう」と夜の明ける間もじれったく思った。

当日，朝も明けないうちに起きて「これに白いところだけを一杯入れてもって来なさい」と下人に箱を持って行かせたところ，直ぐ帰って来て「もうとっくになくなっていました」との意外な返事で私は茫然自失。苦心して作り，人にも語り聞かせたい歌も無駄になった。

「どうしてこんなことになるの，昨日まであんなにあったものが一夜にして消えるなんて」と言ってしょげていると，「植木番が言うには「夕暮までは残っていました。褒美をもらいそこなった」と手を叩いてくやし

がっていました」と下人は言う。

中宮様が「さて，雪は今日までありましたか」と宮中からお聞きがあったので，

「みんなは年内，元旦まではないと言っていましたが，昨日まであったので私の予言は当たったのですが，今日まであるのは上出来なので，夜中に私をそねんで取り除けさせたのだと推察しています。」

とお返事を差し上げた。

二十日に私が参内した時，まずこれまでのいきさつをお話しすると中宮様はお笑いになった。女房たちも笑った。中宮様が言うには，

「ここまで思い詰めてのことで結果が違うのは面白くないので，実は十四日の夜に雪を取り捨てさせたのよ。あなたの推察通りです。実を言うと植木屋の老人が手をすり合わせてお願いに来たけれど，あなたにばらしたら家を取り潰すと脅して，二十日まで待ってももちそうな（「二十日までも待ちつけ」）雪を捨てさせたのです。あなたの勝ちよ，でもその歌どんな歌ですか。」

私はこんな情けないことを聞いて歌まで申し上げられません，とお答えして泣き出したい気持ちでした。主上も聞いていて「勝たせまいと思ってやったことでしょう」とお笑いになった。〉（小学館新版 83 段）

経過のあらましは以下である。

12 月 10 日，大雪

12 月 20 日頃，降雨

1 月 1 日，新雪の大雪，中宮の新雪除去の命令

1 月 7 日，清少納言里に帰る

1 月 10 日頃，五，六尺の残雪

1 月 13 日，大雨

1 月 14 日，勝ちの歌まで準備

1 月 15 日，賭の決着日，中宮夜に雪を撤去させる

1 月 20 日，後日譚

決着の日が近づくにつれ，清少納言の小刻みの記事が多くなることに注目すべきである。それは賭事の心理で決着日の迫るにつれ気分が高ぶるからである。清少納言が里に帰り，残る一週間が勝負どころで，十三日の大雨はハラハラさせる場面。しかし，翌々日までは雪は十分に残っている。十四日は勝利宣言と言える日で歌をすら詠んでいる。十四日夜，中宮が撤去させてどんでん返しの結末。二十日に経緯の後日譚。

賭を持ちかけたのは中宮。清少納言は事実上女同士の賭事には勝ったが，中宮の勝ち気には勝てず，中宮のトリックに負けた。この賭が真剣勝負であることは，両人ともに下人にいろいろな仕業を仕掛けていることから分かる。

中宮の勝ち気から来るルール違反は遺憾なことだが，清少納言はふてくされず，また恨みも抱かず，勝敗にこだわらない爽やかな文体に仕立て，後腐れのない結末にしている。無論，清少納言が事実上の勝ちを手にした喜びがそうさせたのである。中宮のトリックを主上が〈「勝たせまいと思ってやったことでしょう」とお笑いになった〉とエッセイを結んでいるのがよい。

この賭事の勝敗は一カ月以上先のことで，それだけに雪山は天候に大きく左右される。自然現象の変更は人間の手の及ばぬことで，いつ雨が降るか，いつまで寒さが続くか予測はできない。本当に雪がもつかどうかハラハラしてひたすらその日の来るのを待つしかない。これが「待ちつけ」である。

この雪山の賭事のエッセイに「待ちつけ（付け）」という語句が上記下線で示したように三回使われている。「待ちつく」の意味は未来のある時点で結果が出るまで待つこと。つまり，結果待ちのことである。「待ちつく」はその日まで待って決着をつけるということであって，ただ漫然と待つことではなく，待ち構えることである。結果が出る日まで中宮，清少納言ともにいろいろと画策している。

日の巡りは天文学的事象であって，地球の昼夜の交代の数できまる。人間が手出しできない無機的な無情な時間経過である。対して賭けた両人の心情は勝ち負けの価値にかかわる有情な時間経過となる。「待ちつけ」の間が有情の間となる。この場合，清少納言，中宮両人は互いに相手のいる賭で，宝籤のギャンブルと異なる。両人の画策が見物だ。新雪を取り除けさせたり，植木番にリベートを贈ったりしている。そこに両人の真剣勝負がうかがえる。

このエッセイは賭の当事者（＝清少納言）が自らの心中経過を綴っている。賭事をした人にしか綴れない文の運びである。中宮がこの日をどう待ったかの心中推理は描かれず，ただ中宮の勝ち気な性格だけが描かれている。

除目待ちは殿上人が行う官吏の栄転待ちであり，ほととぎすの初音待ちは雅心の待ち心である。対して，賭の結果待ちで得られるものは勝ち負けである。そして勝ち負けは喧嘩両成敗を嫌う。勝つか，負けるかのどちらかである。その勝敗は結果が出る日までは分からない。その日まで待つしかない。清少納言はそこに行くまでの成り行きの心理を小刻みに描き出した。

兼好法師は『徒然草』の随所で勝負事について意見を述べるが，なかでも「万の遊びにも，勝負を好む人は，勝ちて興あらんためなり。おのれが芸の勝りたる事をよろこぶ。されば負けて興なく覚ゆべき事，又知られたり。」として，勝敗には必ず当事者の興不興が伴なうとする。そして，兼好はこうした勝負は将棋双六の遊びで，真の勝負は学問のそれで，遊びの勝負に勝るとする教訓を垂れる（小学館新版『徒然草』130段）。しかし兼好法師は，清少納言のように勝敗に至る心理プロセスを明かしていない。

さて，この賭事の段とも言うに相応しい83段は，この賭事の長さに呼応するかのように文章が長く，要約では省略したが前半にいささか余分と思える文章を清少納言は挟んでいる。それが読者に気を持たせる技法ともなる。読者には賭の結果の成否を予め知らせず，また事件の結末の予断を許さない文の運びにして，いわば推理小説の構成に仕組んでいる。ハラハラドキドキ

させるスリルな文章の運びは賭事のそれとそっくりで，中宮のトリックを最後の最後まで読者に明かしていない。作者清少納言が中宮のトリックだと自ら推理したように，読者もそう推理するしかない。最後の一月二十日の後日譚でトリックが明かされる段取りである。これは見逃せない清少納言の文才である。平安朝の物語文学に見られない天晴れな賭事のエッセイと評価したい。

清少納言は勝負事に関心があった。随所に囲碁，双六の叙景がある。まず，「つれづれをなぐさむもの」を囲碁，双六としている（小学館新版 134段）。さらに，双六と囲碁の短文がある（同 139，140段），双六の方の叙景に，「賽を責めこひて，とみにも入れねば，筒を盤の上に立てて待つに，……心もとなげにうちまもりたる」（同 139段）とあって，サイコロを筒に入れない対局者の待ち遠しい様を清少納言がはたから観戦している。

以上，清少納言の「待つ間」の叙景に，彼女自身の待ち時間観のみならず，平安朝の宮廷貴族の生活模様と人間模様のいくつかが読み取れるのである。

二節 『尤之双紙』の「待つものの品々」

『尤之双紙』（1634年）は江戸初期の仮名草紙に収録されている。

『枕草子』（996年頃）とそれをまねた『犬枕』（1606年頃）の二書を視界に収め「枕」から木扁をとり「尤（もっとも）」とした旨の序があり，『枕草子』の対（つい）の「双子」としゃれたもの。山，海，橋，鳥，木，滝などの「もの尽くし」は『枕草子』のお得意とするところ，それに倣って，長き物，うるわしき物，憎き物，恥ずかしき物，等の「もの尽くし」は『尤之双紙』に八十項目ある。

『枕草子』から六百数十年余も経過しているものをここにいきなり並べて取りあげるのは以上の理由のほかに，筆者が日本人の「待ち心」の研究途上でこの『尤之双紙』に出会い叱咤激励されたことにもよる。筆者は「待ち

心」の研究を始めた時この著作は知らなかったし，自分が今していることにいささかおぼつかなかった，その時に，筆者と同じ関心を持っていた人が江戸時代初期にいたことにおもわず独り快哉（かいさい）を叫び，「同僚」を今に見出した思いがした。『尤之双紙』（上）の三十五番目の「待つものの品々」を読んだ時の歓喜は今でも忘れがたい。

なにしろ徳元が八十項目中に「待つものの品々」を取りあげたことは希有のことだ。日本人の「待ち心」の伝統が古代より脈々と続いていて，それが日本人の心性を造形していることを浮き彫りにしているからだ。天晴れの一語に尽きる。

作者は斎藤徳元（1559–1647）。

この徳元を少し後の井原西鶴の笑い話しで紹介して貰うことにしよう。

『西鶴名残の友』の一話「鬼の妙薬爰に有」——

〈暑い夏，汗を流しながら徳元が江戸から京に上り，粟田口にさしかかったところ，水場で沢山の鬼どもが火の車を捨てて，燃える胸を苦しい苦しい死にそうだと言って清水をがぶがぶ飲んで癒している。その様は見るもむごたらしい。その中に世間通の頭の禿げた鬼が徳元の持つ薬箱に気づき言うには，「御覧の通り我らは罪人を責める獄卒でござるが，この度大悪人を斬罪した磔死体を塩漬けとは知らずうっかり食べてしまい，喉がからからで，この水を飲んで当たり下痢を起こしている。地獄には医者はござれど，なにぶん火の車を引く旅の途中でのことなれば，御助け下さい。」

徳元は毒を制するには毒との処方で，塩漬けの磔の遺体をついばんだ烏をとらせ煎じ飲ませ助けてやった。鬼どもは焦熱地獄の鉄火の炎を降らせ「さらばさらば，あの世へお越しの際のお礼はあれにて」と言って火の車を飛ばした。〉（岩波新版『西鶴名残の友』〔1699年〕pp. 489）

しかし，斎藤徳元が医者であったという事実はなく，おそらく，『犬枕』の著者秦宗巴が豊臣秀次の侍医であったことと錯誤したか。

斎藤徳元——美濃の墨俣の城主，関ヶ原合戦後，京極忠高に仕え小浜に住

む。江戸に移る。江戸俳壇の長老。織田秀信に仕える。里村昌琢と親しく同門の貞徳とも昵懇。『俳諧初学抄』(1641年)。1647年没，享年八十九歳。

『尤之双紙』は『枕草子』から六百数十年ほど経過している，それだけに日本人の「待ち心」にとって興味は尽きない。奈良平安時代から待つ対象がどう変わって来たかを知ることもさることながら，日本人の「待ち心」が延々と続いていることの物証でもあり，斎藤徳元なりの江戸初期までの日本人の「待ち心」の集大成でもある。

おおざっぱに見てこの「待つものの品々」は奈良平安時代から現代までの中間駅に当たる代物と見て差し支えない。中間駅で何を荷積みしたかである。

作者斎藤徳元は『俳諧初学抄』の著者であり，和歌に精通し，漢詩に造詣が深かった。もの尽くしの適例としてよく和歌を取りあげている。『尤之双紙』を一見しただけでも彼の博識多才ぶりは百科全書並で驚嘆の念を覚えるだけでなく，日本の自然，人事，心理，古典文化全般にわたる彼の観察も細密で鋭く，「待つものの品々」を日本文学史的に鳥瞰的に概観している。「待つものの品々」の全文を掲げておこう。

「一，初春より待つ物は，花，鶯。

あら玉の年たちかへるあしたより待たるゝ物はうぐいすの声

(拾遺 5 春　素性法師)

春きてもつれなき花の冬こもり待たじと思へば岑のしら雲

(新拾遺 春上)

ほとゝぎすを待。

いかにせん来ぬ夜あまたの郭公待たじと思へばむら雨の空

(新古今 214 夏　藤原家隆朝臣)

人を待。

待つ宵にふけゆく鐘の声聞けばあかぬ別れの鳥は物かは

(新古今 1191 恋三　小侍従)

（歌意――夕方から愛しい人を待っているのにもう深更の鐘の音が聞こえる，暁がたの別れを告げる鶏の声なんかものの数でないよ）

日待。月待。申待。十七夜は立待，十八夜は居待，十九は臥待，廿日寝待。夏は涼しき風を待つ。秋は，稲葉もそよとの刈りしほを待つ。冬はまだきより（＝はやばやと），門〳〵に松を立て，春を待つ。ますら（＝勇ましい）男は，笛を吹て，鹿の寄るを待つ。ふるさと人は，旅より帰るを待つ。

山上有山帰不得（さんじょうにやまありかえる事をえず）

湘江暮雨鷓鴣飛（しやうかうのぼうしやことぶ）

蘼蕪亦是王孫草（ひぶまたこれわうぞんさう）

莫送春香入客衣（しゆんきやうををくつてかくえにいらしむる事なかれ）

（孟遅・閑情）

はたご屋には，飯を焼て，往来の旅人を待。鷹をうつ人は，秋の山に鳥屋をきりて，網をはり，ゑたかをふり，うわの空とぶ鷹を待つ。氷室守は，三冬の雪を太谷（みたに）にあつめて夏を待つ。八瀬，大原の炭やきは，竈をふすべて冬を待つ。谷の杣木（そまぎ）は雨を待つ。曲水になみゐる歌人は，流れにうかぶ盃を待つ。東山，西山の花もみじの比は，都人を待つ。

小倉山みねのもみじ葉こゝろあらばいま一たびの行幸またなん

（拾遺 1128 雑秋　小一条太政大臣）

ねずみ戸には，太鼓をたゝいて見物の人を待つ。よめ入りには，待女臈を置て，輿の入りを待つ。昔，河内の国高安の里に，女ありけり。大和人を待て，

君があたり見つゝおふらん伊駒山雲なかくしそ雨はふるとも

（『伊勢物語』23 段）」（岩波新版『仮名草子集』pp. 88）

まとめると，

1）花，鶯，ほととぎす，四季の春，夏の風，秋の収穫，氷室の夏，炭焼の冬，樵の雨

2）夫（男），旅の帰り，都人，旅客，芝居の観客

3）日待，月待，申待（＝庚申待），月（立待月，居待月，臥待月，寝待月）

4）鹿，鷹

5）曲水の盃

6）待女郎

これらの内でいくつかのものはすでに取りあげた。まだ触れていない事柄については後続の章で詳しく触れるが，先取りして概略を述べておこう。

鹿待ち――鹿の狩猟は樹上の「まち木」で待ち伏せして弓矢で射止めるか，灯で鹿の目を照らして射止める（照射＝ともし）。

氷室，炭焼はすでに平安時代にある。

能「氷室」に氷室のいわれが説かれている。丹波路の亀岡，八木町。夏に天皇に氷を捧げたのが起こり。「去年のままにて降り続く　雪のしづり（＝積もった）を掻き集めて　木の下水に掻き入れて　氷を重ね雪を積みて　待ち居れば春過ぎて　はや夏山になりぬれば　いとど氷室の構えして」（新潮社版，謡曲下 p.144）

炭焼の歌――

この頃は小野のわたりに急ぐらん冬待ち顔に見えし炭焼き

（相模集）

鷹待ち――鷹を使って獲物を取る鷹狩りのことでなく，鷹を捕獲すること。懸崖に小屋を作り，鷹がやって来るのをうかがって木々に網を張っておき，死鳥を餌にして捕獲する。鷹の飛来を待つ。

稲作民族は秋を待つ。鎌倉末期の慶運の歌一首，

小山田にとるや早苗のけふよりも稲葉の雲の秋ぞまたるる

（「慶運百首」26　岩波新版『中世和歌集』室町篇）

樵は山で木を切りそれを筏にして川で下流に流した。よって梅雨を待つ。

東海道，中山道の発達によって，旅籠屋は客を待ち呼び込んだ。

室町時代に芝居がはやり，客は狭い木戸口から出入りした。太鼓を叩いて

客を集めた。

待女郎――婚礼で花嫁の到着を待ち受け，付き添って世話する女。御伽草子の「鼠の草子」（江戸初期）にも「待ち女房」として出て来る。長者柳屋三郎左右衛門の婚期の遅れた一人娘と，前世の因果たる鼠の身を後は人間様の身にと願う古鼠の権頭とが，清水寺に願掛けに出かけ境内で知り合う。その婚礼の晩に花嫁を世話するのが待女郎（小学館旧版『御伽草子』p.510）。

曲水の宴については最後に説明する。

『尤之双紙』は『枕草子』や『犬枕』に欠落している「もの尽くし」を補うものであると，その序に書いてあるが，それらの比較考量は本論の課題ではないので，「待つものの品々」だけに絞りたい。

『尤之双紙』の特徴付けに入る前にそれが手本にした『犬枕』について触れておこう。『犬枕』は「嬉しき物」をはじめ73項目あり，その品々の項目を箇条書きにしている。例えば，

「胸の痛き物」として，「一，思ふ事言はぬ，一，二日酔の朝，一，言ひ出されぬ恋路，一，来ぬ人を待つ」と言った具合，しかし，

「心もとなき物」としては，「一，国を隔て故郷の事，一，知音の煩（＝知人の病気），一，男の留守に女房の寺参り（＝寺の坊主と懇ろになる妻）」が挙げられ，現代の「心配，安心できない」の意味で，『枕草子』の「心もとなし」の意味と全く変わっている。

『犬枕』には「待つ物」の項目はない（岩波旧版『仮名草子集』pp.34–48）。

一般に，『尤之双紙』は「もの尽くし」であって，ことさら待つ対象が枚挙される点では『犬枕』と同じスタイルをとる。

奈良平安，鎌倉を経て江戸初期までの一切合切の集大成とまではいかなくとも，要点が押さえられている。ほととぎすの初音待ち，「待つ恋」の歌，鹿待ち狩猟から江戸に盛行した庚申待（御猿待），婚礼の待女郎まで集められている。和歌，物語，説話，漢籍などからの収録があるばかりでなく，炭焼，木材の引き出し，稲の収穫待ち，芝居小屋の客の呼び込み，街道沿いの

旅籠の旅人待ちなどの経済活動の現象にも注目されている。

待つ対象として列挙したものは，季節上，暦上，定期的に巡って来るものが多い。庚申待は干支の組み合わせで六十日ごと，年六回ほどある。日待ち，月待ちも徹夜して遊興するハレの民俗行事（祭り）。江戸時代大流行の庚申待ちは後々の章で詳しく述べる。

『尤之双紙』の「待つものの品々」の特徴は，待たれる対象列挙であって，待ち手の心情，情緒，緊張感などのことには触れられない。それでも「遅き物のしなじな」（上 16）として，

「日待ちの夜の明くる。二十三夜の月待。申待の夜の鶏の声。人を待つ間のひとり寝。

嘆きつゝひとり寝る夜の明くる間はいかに久しき物とかは知る

（拾遺 恋四 912　道綱母）」

が挙げられ，「待ち心」の心情に触れている。また「待つ恋」の「待ちえて逢う夜はうれし」を「うれしき物のしなじな」の一つとして挙げることも忘れていない。

そのほか，徳元が「待ち」の語句を入れた項目は――

「待つ夜の障り有るは悲し」（上 12）「弘法大師入定にて，二尊三会暁を待ちてしんしんとある奥の院」（上 14）「人待つ寝屋のともし火」（上 38）「日かげ待つ間の朝顔」（下 22）

徳元の待つ品々にはあまり新しいものが付け加わっていない。江戸時代の旅の客引き待ち，待女郎ぐらいである。

筆者が後々に言及する来迎待ち，待ち伏せ戦法，夢告げ待ち，遊廓遊女の客待ちは当時すでにあったが注目されていない。

清少納言と斎藤徳元の待つものの品々を比較してみると，徳元の方は「もの尽くし」に徹していて，つまり待たれる対象の摘出に限っていて，待つ人の心情，時の美意識，意識の緊張感には触れずじまいである。この点で清少納言は徳元を遥かに凌いでいる。

曲水の宴――

中国の周代から伝来した春の行事。晋の書家王羲之が始めた賀宴（353年）。三月三日。奈良時代にすでに行われ，『万葉集』（3975）に出て来る。朝鮮にもある。日本の寝殿造の庭園には導水施設がついていて，庭園の曲がりくねった流水に酒杯を浮かべそれが通り過ぎない前に和歌を読む。連歌のごとき即興性が求められる。曲水の流れは速く，酒杯が流れ着く前に短冊に書き込まなければならない。出来ないと盃は干せない。徳元は「曲水のさかずき」を「早き物の品々」に数えている。

長浜市大通寺の一間に円山応挙の襖絵「蘭亭曲水宴」があり，唐人の遊興の様子が描かれている。

京都伏見区，鳥羽離宮跡の城南宮で，四月二十九日と十一月三日にとりおこなわれる曲水の宴は平安貴族の雅を偲ぶに十分である。平安朝衣装と時節が織りなす色彩が，盃の流れとすばやい作句と諧和し，さながら華麗な流れる絵巻物。盃の流動感と句作の緊張感が綯い交ぜになって流れの間をつくり，そこに華麗な雅の衣装が映る。

藤原公任（996–1041）の『和漢朗詠集』の漢詩に，

石にさわって遅く来れば心ひそかに待つ，流れにひかれてはやく過ぐれば手先づ遮る

礙石遅来心窃待　牽流遄過手先遮　　雅規

とある（小学館新版『和漢朗詠集』42　雅規）。

盃が石にさわってゆっくり流れて来るまでに詠み終わった場合はこころ密かに待つが，詠めなければ手で盃を遮ってまで詠もうとするあわてぶりが詠じられている。よってすばやい連歌の即興性が求められる。

盃をさすが女の節句とてもものあたりに手まづさえぎる

（岩波新版『狂歌才蔵集』90　四方赤良）

江戸時代の狂歌人四方赤良（よものあから＝蜀山人〔1749–1823〕）は，先の菅原雅規の漢詩を念頭に桃の節句の狂歌を詠う。盃のすばやい流れを手で妨げ

るを，衣装の乱れで見える女の股を手で見えなくするに翻案した。

桃の節句（三月三日）に美しく競い纏う衣装の裾の乱れにのぞく女の股（もも）に江戸時代の浮世絵的エロチシズムが垣間見える。

（つづく）